

# オックスフォードでの留学体験 ～感謝の気持ちと自信を持って～

英国オックスフォード大学 博士課程 教育学研究科 林 裕子

## ●新たな挑戦に挑むまで

今回の英国留学は二回目になる。一回目の留学では、大学四年生の前期に、ロクターリー財団国際親善奨学生として、エセックス大学に約八カ月間留学した。財団と関連するチャリティやスピーチなど様々な親善活動を行う一方で、エセックス大学では正規の学生と同様、受講するコースを選び、講義や授業に参加した。二学期目に、応用言語学のコースで実証研究を行うことが課題として出された。一番苦労した課題だった。当時の私には、フィールド調査実施方法や、質的・量的データ解析に必要な知識が十分に備わっておらず、毎日必死に本を読み、コース担当の先生とミーティングを重ねた。何とか終了することができたものの、充実感というより、物足りなさだけが残った。研究方法論や応用言語学の先行研究について本格的に学びたいという気持ちが出てきたためだと思う。

佐賀大学への復学後、所属していたゼミの先生に「学術的なことを本格的に学んでいきたいです。」と、進路相談をした。その時、英語圏の大学院にて修士号を取得すること、それに向け、文部科学省「大学教育の国際化推進プログラム（長期海外留学支援）」（以下、長期海外留学支援プログラム）に申請するこ

とという可能性があることがわかった。無理かもしれないと思ったが、オックスフォード大学の応用言語学・第二言語習得研究 (Master of Science in Applied Linguistics and Second Language Acquisition) という修士課程に申し込んだ。同時に、文部科学省の長期海外留学支援プログラムにも申請した。それから二カ月後、文部科学省での最終面接の前に、オックスフォード大学より入学許可となる合格通知が届いた。残るは奨学金の獲得であった。緊張感高まる中、面接試験に挑んだ。オックスフォード大学からの合格通知のおかげで、面接でのアピールポイントが一つ増え、自信につながった。結果は「合格」だった。奇跡が二度起きたようだった。ただ、これら二つの合格を得るまでの過程は、苦勞と忍耐の連続であった。私には固い決意はあったが、一人では決してこのような結果には結びつかなかったと思う。佐賀大学の先生方や家族や友人の支えがあったからこそ実現できたのだと確信している。新たな挑戦に挑む機会を与えていただいた方々には心から感謝している。

## ●オックスフォードへ

オックスフォード大学は三八のカレッジから成っており、学生は学部や研究科の他に、必ず一つのカレッジに所属することになる。

私はウスターカレッジ (Worcester College) に所属することになった。第一希望のカレッジであったため、その決定は嬉しかった。湖と芝生に囲まれる自然豊かなカレッジであり、学部生約四二〇名と大学院生約一九〇名が在籍する。在学中は、カレッジ指定の寮に滞在することになった。二〇〇七年の九月中旬に渡英し、空港から寮に向かった。九月下旬は、オリエンテーションやインダクションプログラムの参加が続いた。修士課程の仲間や同じカレッジのメンバーと知り合う機会に恵まれた。友達が増えて喜ぶ一方で、会話の速さや会話を進めるのに必要な言語スキルのレベルの高さに圧倒される日々が続いた。政治、経済、観光、テレビ・映画など様々な話題において高レベルの言語スキルが求められる。特に、テンポよく英語を話すことは、交友関係を築くのに重要なスキルだと感じた。発話が遅れると、他者が入り込み次々と発言し、自分抜きでも会話がどんどん進んでいく。思うように（欧州風に）会話に参加できず、「社交的ではない」「意見を持っていない」「英語が話せない」など、消極的だというレッテルが貼られてしまうことに対する不安や焦りを感じた。

そこで意気消沈せずに、前向きな姿勢を貫くことが大事だと自分に言い聞かせた。流暢さや会話スキルにおける言語の壁はあっても、友好的に接することはできる。寮では、台所のみを他の六人の寮生と共有していた。六人のうち五人はイギリス人学生であり、もう一人はネイティブ並みの英語を話すドイツ人学生だった。当時のウスターカレッジには、日本人の大学院生は私一人のみであった。これは言語力を伸ばす最適な環境だと思った。寮生活にはすぐに溶け込むことができたが、言語の壁が完全に取除かれたという訳ではない。うまくいったのは、相互理解があったからだと思う。私の積極的かつ友好的な態度が報われたのか、友人は私の英語に親身かつ辛抱強く耳を傾けてくれた。一年目の終わりに「英語上達してきたね。最初の頃に比べて速く正確に話せるようになった。」と、温かい言葉をかけてもらった。英国出身の学生のみならず、世界各国からの留学生との交流も語学力上達への重要な要因であると思う。オックスフォード大学全体の学生数（二〇一〇年五月現在で二〇九二七名）の中で、留学生の占める割合は、学位やコースにもよるが、五〇～六〇％にも及ぶ。したがって、世界各国からの学生や研究員と接する機会は満ちあふれている。多様な英語に接することで、母語話者とは異なる自らの英語に何の抵抗も感じなくなった。むしろ、一つ一つ



ウスターカレッジの外観

の発言に自信が持てるようになり、発話の際の語彙や文法に関する少々の間違いを気にすることがなくなった。

## ●修士課程から博士課程までの道のり

修士課程では、特に忙しい一年を過ごした。一年間は三つの学期に分かれている。最初の二学期間は、学期中（各八週）に授業を受け、冬休みと春休み中（各五週間）に四つのエッセイを書き上げることが課題として出された。学期中は、日々一定の読書量をこなすことで授業の予習・復習を十分に行えるよう目指した。時には、平日に思うように時間が当てられず、週末にまとめて行うこともあった。勉強をしていないと落ち着かないことすらあつ

た。競争心から生まれるプレッシャーが主な原因だったと思う。同課程は約三〇名の学生から構成されていた。授業中は、積極的に意見を述べる学生が多く、先生も交えて議論がよく盛り上がった。私も建設的な意見や質問を述べながら、議論に貢献できるよう努めた。そうすることで、自らの批判力や議論力に磨きがかかったのを実感した。また、議論の最中に発言を控えることで、「受身になり過ぎている」「集中していない」などのマイナスな印象を与えないよう努めた。同課程の学生とは、授業外でも定期的に会う時間を設け、社交面においても交流を深めることができた。

団結力が強いグループだと感じていた。しかし、徐々に互いの競争心が見え隠れしているのが感じられた。特に、課題の時期になると張りつめた空気が漂っていた。エッセーのトピックの発表後に待っているのは、図書館にある必要文献の確保に向けた「早い者勝ち競争」だった。複数コピーがある文献であっても、その数は限られていた。その上、休暇前に貸し出された本は、通常一週間で返却のところ、休暇終了時まで約一カ月間保管してよいことになる。このように多少苦労することもあったが、一週間に一つのエッセーを仕上げ、最後の一週間で最終確認というペースで、無事に八つの課題を終えることができた。精

神的な限界を感じたこともあった過酷な一〇週間であった。

そして三学期目になり、修士論文研究のために、日本人成人英語学習者とイギリス人英語話者を対象とした実証研究を行った。異なる条件での英語の語彙知識の幅と深さを測定し、分析を行い、実証研究をまとめた。本研究は学術誌「The Language Learning Journal」に掲載が決定しているため、詳細はそちらを参照されたい。

修論研究実施中に、指導教官より、次年度に行われる研究トレーニングプログラムにPRS (Probationer Research Student)として参加することを勧めていただいた。PRSプログラムでは、約一年間、社会科学分野での研究に必要な知識やスキルを磨くための理論的・実践的なトレーニングを積む。プログラムの最後に口頭試験があり、合格するとD P h i l (Doctor of Philosophy)、つまり、博士課程に進学することになる。更に一年、博士課程を含めると合計四年間にわたり研究に専念するという展望に圧倒されそうな時もあった。しかし、今挑戦しなければ、同じような機会は二度と訪れないかもしれないと思い、新たな研究修行を積む覚悟を決めた。そうして、文部科学省長期海外留学支援プログラムの二年目に、PRSプログラムに参

トやタスク活動に取組んでくれる。そんな子ども達の姿勢に励まされ、前向きに調査を進めることができていた。また、自分の研究に興味を持つてくれる人がいるということは大きな自信にもなっている。今年、日本でのデータ収集も予定している。協力してくれる人々への感謝の気持ちと、自らの研究に対する自信を忘れずに、博士号取得に向け、一層努力していきたい。

以上のように、様々な苦労や試練を乗り越えて今の自分、そして今のオックスフォードでの充実した生活があると思っている。海外留学は大学一年生の頃からの夢であったが、自費では無理だと諦めかけていた。そんな時、ロータリー財団の奨学金プログラムに合格し初めての留学体験を得た。帰国後、学位のための再留学は叶わない夢だと思っていた。それでも挑戦しなければ何も始まらないと思い、文部科学省の長期海外留学支援プログラム、続いてJASSOの留学生交流支援制度(長期派遣)に応募した。私の可能性を信じ、修士・博士研究のための支援体制を敷いていた文部科学省の方々、JASSOの方々、さらに佐賀大学の先生方には、今後より良い研究成果を発表していくことで恩返しをしていきたい。

将来留学を考えている人たちに伝えたいこ

加することが決定した。同プログラムの学生の出身分野は、政治、経済、医学、言語学など広範囲にわたり、改めて教育学という領域の広さと深さを実感した。プログラム参加者三〇人のうち、応用言語学の背景を持つ学生は四人とごくわずかであった。そのせいか、当初は「少数派」という負い目を感じてしまい、研究発表の機会が訪れても担当することを避けていた。必須授業では主に、社会科学分野で用いられる様々な研究方法や倫理的考慮について学んだが、言語学習や言語教育についての話題が取り上げられることは極めて少なかった。次第に、新たに立ち上げようとしていた自らの研究プロジェクトへの自信を失い始めていた。

そんな時、自信を取り戻すきっかけとなる出来事が起きた。当時、文部科学省の長期海外留学支援プログラムはPRSプログラム終了時で満期を迎えることになっていた。つまりPRS終了後の博士課程では新たな奨学金が必要だったのである。そこで、佐賀大学を通して、日本学生支援機構(以下JASSO)の「留学生交流支援制度(長期派遣)」に博士号取得に向け申請ができることを知った。応募が出るとすぐに申請した。その選考においては、書面と口頭の両方で、新たなプロジェクト「日本人児童の英語と日本語における語

とがある。あくまで個人の経験に基づいてではあるが、留学には、準備段階においても、開始後においても、「がむしゃらさ」、或いは、「ハングリー精神」が必要であると考える。遡って考えてみると、海外留学への支援を得ることができた大きな要因は、やはり、学部と大学院でのGPAだったと言える。(実際に応募要項では、ある一定の数値以上の成績評価係数が求められる。)私は、大学二年生の頃に本格的に留学を意識し出し、受講していたどの授業においても「優」以上の成績を目指した。講義の先生方に良い成績を以って、自分の存在感をアピールできればと考えた。修士課程の時も、研究に対する意欲と研究成果を少しでも高く評価してもらうため、睡眠時間を削りがむしゃらに勉強した。学生間の競争も激しく、非常に大きな精神的プレッシャーや苦労があるが、それに耐えられるだけの内面的な強さがあったこそ、充実した留学生活が得られるのだと思う。そして、繰り返しになるが、留学生活を支えてくれる人々への感謝の気持ちと、自らの取組への自信を常に持って留学生活を送ることに真の意義があると思う。

【編集部・注】

JASSO留学生交流支援制度(長期派遣)の詳細については、左記のURLをご覧ください。  
([http://www.jasso.go.jp/scholarship/long\\_term\\_j.html](http://www.jasso.go.jp/scholarship/long_term_j.html))

彙彙達についての調査研究」の内容と重要性についてアピールした。最終結果は「合格」だった。この結果により、自らの研究への意欲を確かめることができ、自信を取り戻すことができた。私の研究は、革命的なことが導き出されるような分野の研究ではないかもしれないが、語彙能力は、児童の読み書き能力や読解力に深い関係があり、小学校六年間で著しく伸びる言語力の極めて重要な一要素である。博士課程の研究では、その要素を、第一言語習得、第二言語習得、バイリンガル発達の観点から追求する。

### ●博士課程での現状と留学の意義

オックスフォードに来て約二年半になる。現在は、イングランド地方在住の日本人児童とイギリス人児童を対象に、語彙発達調査のデータ収集を行っている。小学校中・高学年の児童が対象であり、調査のためのテストやタスク活動を実施している。本調査は、イングランド地方にある日本語補習校や現地の公立小学校の先生方、バイリンガル教育に熱心な保護者の方々の協力を得て、只今進行中である。私一人では決して実行できない研究であり、いろいろな方々の支えがあることが非常に有難い。子ども達も長時間のセッションにもかかわらず、最後まで笑顔で熱心にテス